

都留文科大学報

第110号

2009年
6月24日(水)

編集 都留文科大学広報委員会

〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 都留文科大学内
☎0554-43-4341 URL: <http://tsuru.ac.jp/>

都留文科大学入学式…………… 2

今谷学長より新入生を迎える言葉
社会学科現代社会専攻 中村莉奈
比較文化学科 大澤愛里

文大に着任するにあたって…………… 4

初等教育学科 田中昌弥教授／英文学科 三浦幸子准教授
初等教育学科 市原 学講師

学外研究をおえて…………… 7

初等教育学科 相守光恵教授
英文学科 竹島達也教授／社会学科 千葉立也教授
比較文化学科 大辻千恵子教授

公立大学法人都留文科大学設立にあたって 11

西室陽一理事長
今谷 明学長兼副理事長／高田理孝副学長兼理事
福田誠治副学長兼理事／椎 廣行事務局長兼理事

授業評価結果について …………… 16

授業評価部会・前部会長 前田昭彦教授

就職委員会から …………… 18

就職委員長 千葉立也教授

講演会だより 講演会のお知らせ …… 20

初等教育学科・特色GP、英文学科、社会学科

文大だより …………… 21

春のコンサートを終えて…………… 21
本学陸上競技部女子がBS日テレで特集放映……………22
全国38局ネットFMラジオ番組が本学で公開収録 …… 22
朝日新聞Be-evening「花まる先生」公開授業に本学卒業生 22
元学長 大田堯氏 本学フィールド・ミュージアム視察 23
四氏に名誉教授の称号を授与…………… 23
第40回つる子どもまつり開催…………… 24
児童文化研究部が文部科学大臣賞受賞…………… 24
平成21年度教員免許状更新講習開講……………24
平成21年度現職教員教育講座開講「夏季集中講座」…25
人事異動…………… 25
オープンキャンパス／本 ぶんだい堂…………… 26
編集後記…菊池信輝…………… 26



平成20年度都留文科大学卒業式



大田元学長来訪



第40回子どもまつり



名誉教授称号授与式



都留文科大学入学式

—今年の入学者は859名—

4月5日（日）都の杜うぐいすホールにおいて午前と午後の2部制での入学式が行われました。午前の部では、初等教育学科212名、社会学科現代社会専攻96名、同学科環境・コミュニティ創造専攻70名、文学専攻科8名、大学院文学研究科21名、学部3年次編入35名の2学科、専攻科、大学院等442名の入学が許可され、午後の部では、国文学科143名、英文学科145名、比較文化学科129名の3学科417名の入学が許可されました。

会場の大ホールは、入学者とその保護者でほぼ満席となり、特に午前の部では通路まで保護者があふれ、盛況のうちに入学認定式が行われました。



入学式会場の様子

今年度は公立大学法人設立後の第一期入学生を迎えるにあたり、冒頭の挨拶を西室陽一理事長が行い、続いて今谷明学長の新入生を迎える言葉、小林義光都留市の祝辞が述べられました。入学生代表として午前の部では中村莉奈さん（社会学科現代社会専攻1年生）が、午後の部では大澤愛里さん（比較文化学科1年生）が、それぞれ入学の言葉を読み上げました。

式の最後には本学管弦楽団吉田悟氏の指揮による「花のかげ」を全員で合唱し、厳粛なうちに式が終了しました。

新入生のことば 午前の部

社会学科現代社会専攻 中村莉奈



午前の部代表
中村莉奈さん

暖かな春の陽射しに誘われて、桜もほころび始めたこの佳き日、伝統ある都留文科大学の入学式に臨むことができ、大変嬉しく思います。

私たち新入生一同、これからの大学生活の中で、日々勉学に励み、共に切磋琢磨しながら、充実した四年間を送りたいと考えています。

今日の社会は、インターネットや携帯端末の普及により、世界のあらゆる情報を容易に手に入れることができるようになった一方で、人と人との関わりが薄れ、コミュニケーション能力の低下も問題になっています。また、世界経済はますます悪化の一途を辿っています。百年に一度と言われている不況の中で、「非正規雇用の増大」や「格差の拡大」といった問題だけでなく、「少子高齢化」や「教育・福祉」の問題など、将来にさまざまな不安を抱えている今、自らの将来を思い描いて実現してゆくことは困難なことのように感じられます。

しかし、私たちは自分で自分の人生が選べ、自らの努力によって自分の人生を変えることのできる環境にいることも忘れてはなりません。ただ、それは同時に、とても厳しく、他の誰のせいにもできないことでもあります。

そのような時代だからこそ、都留文科大学で専門的な知識と教養を身につけ、現代社会が直面する問題を幅広い視点から学び、探究して、自ら考え、行動できる力を身につけ、さらに高めていきたいと考えています。

また、部活動やサークル活動などをはじめとする大学生活を通して、多くの仲間と出会い、協力し信頼することの大切さを学ぶとともに、地域の方々とも深く関わり合いながら、人間として成長してゆきたいと考えています。

私たちは歴史ある都留文科大学の学生として恥じることもないよう、自覚と誇りを持ち、自分自身の成長、夢の実現へとつなげていきたいと思っています。そして、未来を見据えた目標と、大きな志を持って、大学生としての一歩を踏み出したいと思っています。

式 辞

都留文科大学長 今 谷 明



学長 今谷 明

新入生のみなさん、入学おめでとうございます。(中略)

本学では、この4月1日に法人化改革が行われまして、旧来の都留市立都留文科大学から公立大学法人都留文科大学へと衣替えをいたしました。皆さんは法人化第一期の入学生ということになります。

さて、大学や社会をとりまく環境は、ご承知のように大変厳しいものがあります。

昨年秋のアメリカ合衆国に於ける金融危機に端を発した経済恐慌は、百年に一度のものといわれ、昨年卒業した諸君はじめ、就職活動に取り組んでいる3・4年生の皆さんも、苦労は身にしみておられるのではないかと心配しています。

しかし、環境は大変かもしれませんが、皆さんには卒業したら必ず仕事を見つけて働いてもらいたいと願っています。

4年先のことを今頃、早すぎないかと思われるでしょうが、故人も申している如く、「仕事

こそ人生」であり、労働こそ人間の神聖な権利であり義務であると信ずるからに他なりません。

従って大学では将来の仕事に向けて、目標を持って、計画を進めていただきたい。漫然と学生生活を送っていると、4年の歳月はあっという間に過ぎてしまいます。

私達の大学は、もと県立の臨時教員養成所が母体となり、1955年に短大としてスタートしました。従って創立以来54年になり、地方公立大学としては古参の老舗といつてよいでしょう。

60年に4年制大学となりましたが、初代の学長は「大漢和辞典」で有名な諸橋轍次先生です。

その先生によって決められた学訓(建学の精神)が、「菁莪育才」という言葉です。「菁莪育才」は漢字の四字熟語ですが、中国古典の「詩経」から採られたもので、菁はくさかんむりに青の字、莪はくさかんむりに我の字で、よもぎが青々と茂

っているさまを言うのだそうです。育才は才能を育てる意で、併せて「菁莪育才」には、年若い人材を育てるのを楽しむ、といった意味が込められており、誠に教員を目指す若人にはなむけするには恰好の言葉です。同時に私ども教職者にとっても、ふさわしいスローガンであると思います。(中略)

皆さんは今後の大学生活へ夢をもたれて本日臨まれていると思います。読書・勉学・スポーツ何でも良いのですが、計画を立てて、悔いのない学生生活を送って欲しいと思います。

この都留文科大学はそうした皆さんの前進と努力を心から支援することをお約束して私のあいさつとします。

新入生のことば 午後の部

比較文化学科 大澤愛里



午後の部代表
大澤愛里さん

季節は春を迎え、新たな生命が芽吹きつつあるこの佳き日に、伝統ある都留文科大学の入学式を迎えることができ、大変光栄に思います。これも母校の先生方の御指導をはじめ、家族や友人たちの支え、地域の方々からの温かい眼差しがあってこそだと思います。大学での生活を、実りある素晴らしいものにするべく、日々の精進を怠らず、切磋琢磨していきたいと思っています。

今日の社会は、近來稀に見る世界的経済危機と言われています。なかなか回復の兆しも見えず、私たちの生活は先の見えない不安とともにあります。一方で経済や社会のグローバル化は一層進展し、私たち一人ひとりがその影響に直面しています。発達した高度情報技術に伴い、地球規模のコミュニケーションが、国家・民族を越えて交わされるようになりました。世界的な景気対策も、各国が協調して行われています。また、環境破壊や民族問題等への取り組みも、世界中の

人たちが協力しなければ、成し遂げることはできません。だからこそ私たちには、自国の文化の一層深い理解とともに、異文化理解やグローバルコミュニケーションの力が求められているのではないのでしょうか。

そのような状況下で私たちにできることは、さまざまな文化を学んで専門的な知識を蓄え、卒業後の社会生活に向けて勉学に励みながら、一日一日を大切に過ごすことです。

サークル活動や、学内での人間関係から新たな発見をすることも多いと思います。大学生活のあらゆる場面で、さまざまなことを吸収し、自らの将来に向けてしっかりと準備をしたいと思います。

私たちは混沌とした時代の中にあっても、未来を築き世界の発展に貢献できると信じています。なぜなら、熱意あふれる先生方や多くの仲間たちとともに四年間学べるという、素晴らしい機会をつかむことができたからです。

この歴史ある都留文科大学の学生として、学び、成長し、限られた時間を大きな志をもって過ごしていくことを決意し、新入生の言葉といたします。

新教員紹介

文大に着任するにあたって

「日本」という
異文化を求めて初等教育学科教授
田中昌弥

各県独特の土地柄を紹介するテレビ番組がはやっているようです。画一化が進んでしまった日本にも、風俗・習慣ではまだ昔ながらの多様性が残っているのかと思うと安心もし、それぞれの背景を知りたくなります。

わたしは、学生・院生時代を東京で暮らした以外、生まれも、最初に大学で職を得たのも北海道という道産子です。

年配の道産子は、北海道以外の日本のことをしばしば「内地」と呼びます。おそらく、「外地」に來たのだという開拓者たちの自覚の名残なのでしょう。わたしの祖父母ぐらいまでが使う「内地」という言葉には、祖先の地への思いも込められていたように感じます。

とはいえ、「内地」の記憶は、すでに曾祖父母の世代でも、家族に連れられて渡道する以前の幼少期に遊んだ幽かな光景であり、また、祖父母には、自分の祖父母たちが去る決断をした愛憎交々の地として伝えられていたようです。

それを半ば伝説のように面白く聞いたのがわたしの世代です。わたしの父方の来歴は広島と秋田、母方は香川と徳島というように、北海道人にはいろいろな流れが入ってい

ますから、それぞれの地の話を聞く機会もありました。

そして、大学生になり、何世代かぶりに「内地」に戻って暮らすことになったわけですが、第一印象は、「北海道は日本ではなかったのだ」というものでした。何しろ温帯です。冷帯とは緑の濃さが違います。蒸し暑さも呼吸を通して肺への重さとして感じます。また、古い由来の建物や木、地蔵など、歴史の痕跡が身近にある暮らしも初めての経験でした。そして昔話に聞いていた祖先たちは、北海道に渡って以降のわれわれとは違う日本人的なものの感じ方を備えていたのではないかと興味を持つようになりました。

民俗学や文化論の本ももちろん勉強になりますが、求めているのはもっと身体感覚に近いものです。今回、UターンならぬNターンで文大に着任させていただき、また「日本」を体験できるのが楽しみです。都留を歩き、研究室の窓から豊かな植生を眺めて過

ごすだけでも何かしらの雰囲気がつかめてくるのではないかと期待しています。

また、趣味の柔術を通して昔から伝わる身体技術を学んだのも「日本」理解の大きな助けになりました。陸軍の学校で鍛えられた父の影響からか、子どもの頃からいくつかの武術をかじってきましたが、柔術には、「強さ」を求めることが感覚を鈍らせるとして、「力」を排する繊細な身体文化が保存されており、伝統というものの深さを垣間見る気がします。

しかし、その点では、「日本的」なるものを一まとめにした追究の仕方も、多様性を塗りつぶしかねない鈍感な設定と言えるかもしれません。論理矛盾のようですが、敢えて言えば、多様性への繊細さが、本来の「日本的」な感覚ではないかと最近は考えています。

全国から学生が集まっている文大で、それぞれの地域の話が聞けるのを楽しみにしています。



大事なのは「強さ」より、相手を感じること……

新教員紹介

文大に着任するにあたって

英語教育の輪



英文学科准教授
三浦幸子

昨年11月に開催された、私が常任理事兼事務局次長として所属するELEC同友会英語教育学会の研究大会終了後に、6名の若い参加者が挨拶にきてくれました。中学や高校の教師となった都留文科大学の卒業生たちで、私がこれまで非常勤講師として教育法などの授業を担当し関わってきた人々です。各自の近況と英語教師としての抱負を聞き、学生の頃より頼もしく感じられる姿を誇りに思うと同時に、同じ英語教育の世界に入ってくれたことをたいへん嬉しく思いました。

私は大学卒業後、英語教師として中高一貫校に就職し、中高両方の授業を担当しました。勤務校は英語教育研究に力を入れていたため、幸いにも羽鳥博愛先生や滝口正史先生から直接ご指導を受ける機会に恵まれました。しかし、最初の5年間は運動部や生徒会、生活指導、担任業務に追われ、授業改善の根本的要素である自分の英語教授に関する知識や英語力に限界を感じ、一旦職場を離れて英国の大学院に留学しました。日本に帰国する際、多くの先生方からは中高に戻るよりも研究職を目指すよう勧められましたが、何かをやり残した思いが拭えず、中高の教室に戻りま

した。このとき、指導教官のDr. Alan Tonkynが「君は将来英語教師の養成に関わるとよい。今、中高に戻ることはそのときのためにきっと役立つはずだ。」と言って励ましてくださったのを今でもはっきりと覚えています。しかし、そのときは自分にとっては夢のような話で、実現できるとは思っていませんでした。

その後、自分の授業改善や同じ思いを抱く人々と意見交換の場を求め、学外での勉強会に以前より頻繁に参加するようになりました。H. E. PalmerのOral Methodを研究の基盤とする語学教育研究所の研究員となり、以前文大にいらした故若林俊輔先生からも多くを学ばせていただきました。また、Oral Approachを日本に普及したELECの研究部会でも勉強する機会を得て、教員対象セミナーやワークショップの講師を務めさせていただくようにもなりました。所属する研究グループでは中高連携のス

ピーキング指導と評価に取り組んでいたのも、自分の担当する生徒が英語スピーチコンテストの全国大会で優勝したとき、会の仲間と執筆した『アクティブスピーチ指導書』で語学教育研究所から外国語教育研究賞をいただいたときには、研究が実践と結びついたことに歓喜するとともに、よく努力する生徒たちや向学心あふれる（研究会の）仲間たちに恵まれたことを深く感謝しました。

現在は、ELECの研究部会で中高大連携指導の検討を継続するとともに、個人的にはlingua francaとしての英語の役割と英語教師に必要なコミュニケーション方略に関する研究を深めていき、現場の指導に貢献できたらと考えています。また、前述の卒業生たちのように英語教育の輪に加わってくれる学生たちをより多く育成できるよう、微力ながら精進したいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。



5月に開催されたELEC主催の授業研究会で、下村勇三郎名誉会長、名和雄次郎名誉顧問、参加した文大生たちと一緒に

新教員紹介

文大に着任するにあたって

自己(研究)紹介

初等教育学科講師
市原 学

学生時代から発達心理学、教育心理学の研究に励んできましたが、現在は認知神経科学、進化心理学の視点を取り入れて、不快感情の適応的意義について実験研究を行っています。しかしながら、“心理学”的な研究だけではなく、文学、社会学、宗教学、哲学、それから芸術の立場では、不快感情はどのように理解されているのかということにも興味があります。都留文科大学にはさまざまな専門分野の先生方がいらっしゃるのので、今後親しくおつきあいたいと思いますと幸いに存じます。

さて、これからは私の研究について、簡単に紹介させていただきます。

私の研究テーマは大きく分けて2つあります。一つ目は上記のような不快感情の意義についての探求であり、いってみれば、私の研究者人生を貫くライフワークです。二つ目は、“子どもの自己制御活動(セルフ・コントロール)のメカニズムの解明と応用”であり、こちらは社会的要請に応える研究です。本稿では紙面の都合上、後者の研究について簡単に紹介させていただきます。

“思考抑制の逆説効果”という現象があります。たとえば、心理学実験の中で“シロ

クマのことを考えないでください”と教示されると、実験参加者は当面その指示に従えるのですが、実験終了後しばらくすると、“シロクマ”のことが頭に浮かんで離れなくなってしまうという現象です。“余計なことは考えるな”といわれればいわれるほど、雑念が浮かんでしまうことと同じです。ちなみにこのような頭に浮かんで離れなくなるような考えを“侵入思考”と呼びます。侵入思考は“強迫性障害”(手を洗わずにはいられない、変な考えが頭に浮かんで離れないといった強迫行為・観念を主訴とする不安障害の一種)における重要な概念であり、この侵入思考とどう向き合うかが治療の正否に大きく関わってきます。

そしてこの逆説効果には付随現象も現れます。思考抑制をした場合、しばらくすると感情を抑えることが難しくなってしまうのです。ちょっとしたことで怒ったり、泣いたり、笑ったりするようになるのです。

同様に、感情を抑制すると、その後の思考抑制が困難になります。かいつまんでいうと、逆説効果とは理性(意識)的に頑張れば頑張るほど、意図に反する方向で、無理が何らかの形で現れるという現象です。心理学の

研究では、実験を通して逆説効果を支持するデータが蓄積されています。

私は、この研究知見を子どもの行動上の障害(攻撃性、多動性、学習困難)の理解や支援に援用できるのではないかと考えています。特に、ADHD(注意欠陥多動性障害)の病因論については、大脳皮質前頭前野(実行機能、ワーキングメモリー)に注目が集まっており、機能的に重複する部分があるのではないかと推察しています。彼らが教室で不適切な振る舞いをするのは、そうしたいからというよりも、“いい子”でありたいと頑張った結果なのではないか。今後は実験を積み重ね、仮説の真偽を確かめていきたいと思います。



家庭での研究(育児)風景

学外研究報告

学外研究を終えて



初等教育学科教授
相守光恵

平成4年に1年間の学外研修をいただきウィーンで学ぶ機会を得ることができましたが、このたび再び半期の研修に出させていただきます。今回は横浜国立大学、教育人間科学部音楽科にお世話になり、小川昌文博士のもとで初等・中等音楽教育について、学部学生、院生さんたちの中で講義を受けさせていただくことができました。横浜駅からバスで30分、昔ゴルフ場だったという広大な敷地の緑の中にあるすばらしいキャンパスで再び学生にかえり学べる喜びをかみしめながら充実した日々を過ごすことができました。帰りの電車の中では、その日の講義について考えながら、音楽教育の可能性や難しさ、又、子供たちに発する一言の重み、授業の組み立てについて等深く考える機会となりました。本学音楽専攻卒業生である北川翠、前田恵子の二名が、横浜国大の大学院に合格して研究活動をしているので、彼らの勉学ぶりを見ることができ、又彼らの友人たち、内モンゴルからの留学生とも親しく交流でき、大きな夢や使命を持った希望の人たちを頼もしく思ったりもしました。本学に勤務して以来、教育実習の研究授業を参観に行ったり、実習から帰ってきた学生さんたちから報告を受

音楽教育の可能性を求めて

けたりする中で、音楽教育の重要性を感じ、いつの日か学びたいと考えている中での小川博士の講義の内容は非常に盛り沢山でした。音楽の授業を通して、感性を磨き精神の豊かな表現力のある情操教育をするにはどのような工夫や技術が必要であるか、又、“育てる”“培う”のちがいは何か、音楽を使って何ができるのかを学ぶことができ、あらためて音楽の持つ力、心、環境を変える力があること等を深く思索することができました。小川先生の人間に対する深い愛情、洞察力に感動し、かざらない無作の姿に真の教育者の姿を見せていただきました。

又、学童前の幼児にどのように専門的な音感教育をするのかを、桐朋学園附属子供のための音楽教室で見学させていただけたことも長年念願でした。3、4才児に音、リズ

ム、和声等を音叉を使い徹底的にラの音から教えていくのは驚きでもありましたし、見学に行った日は、一日中私の頭の中でラが鳴り続ける強烈なレッスンでした。しかも、3、4才児で60分、5才児では大学並みの90分レッスン、子供は7人、先生3人というクラス編成にも驚かされました。ラを中心としたわらべ歌を四分音符のステップをふみながら音程の幅とリズムを身体に覚えこませていく内容で、長年に亘る教育経験と研究から編み出された水準の高いシステムを見せていただき、貴重な体験となりました。

あっという間の半年間、音楽専攻生たちの事を心配しながらの日々でありましたが、得たことを学生さんたちに伝えていきたいと考えています。貴重な時を与えてくださり本当にありがとうございました。



横浜国立大学教授 小川昌文氏と

学外研究報告

学外研究を終えて



英文学科教授
竹島達也

2008年度に本学の学外研究制度を利用して、1年間アメリカ合衆国に滞在した。客員研究員としての受け入れ先は、コネティカット州ニューヘイヴン（New Haven）にあるイエール大学（Yale University）であり、自分の専門分野の関係からマンハッタンの劇場街にも比較的容易に出られる立地条件を考えて、住居はコネティカット州のダリアン（Darien）という町にした。ダリアンは、アメリカが独立する前、18世紀初頭に開かれたコミュニティーで、その南側が海（Long Island Sound）に面し、個人の住宅がその広大な森の中に点在している。日常的に、鹿やうさぎや七面鳥、夏には蛍も見られる、素晴らしい自然環境を有した町である。マンハッタンから北東に延びる、メトロ・ノース（Metro North）のニューヘイヴン線は、ニューヘイヴンが終着駅であるが、そのほぼ中間点に住居を構え、イエール大学とブロードウェイにほぼ1年間を通じて通ったことになる。

イエール大学では、英文学科に所属し、演劇研究（Theater Studies）を中心に、日本文学・文化研究にまで興味・関心を広げ、今後の研究や教育の方向性を考える上でも有意義な時間を送ることが出来

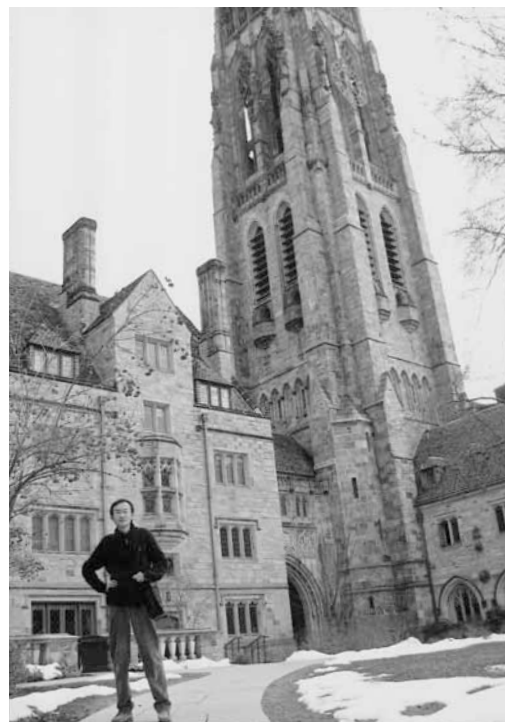
た。全世界から研究者や留学生を受け入れていることもあり、教授陣やスタッフは、非常に親切で、特に以前から面識がなくても、セミナーや講義への出席はもちろん、専門的な研究上の話し合いにも気持ちよく応じてくれた。時には、セミナーの中で、日本に関する映像作品について授業をするように依頼されたが、その時の、学生たちのわが国の文化や歴史に対する強い興味には感動を覚え、とても良い思い出になった。

また、図書館をはじめとする研究施設の素晴らしさは言うまでもなく、イエール大学の大学院を含めた全授業の約8割が20人以下のセミナー形式のものであり、日本の大学では普通に見られる大教室での講義が極めて少ないことも印象に残った。

ブロードウェイでは、1年間を通じて、様々な劇作品の上演を見ることが出来た。主として20世紀初頭から現在に至るまでの、アメリカの戯曲を、新作や名作のリバイバルを中心に観劇した。ジャンルとしては、ウェル・メイドな喜劇、悲劇性の高い社会劇、1960年代の実験性の

強い不条理演劇、表現主義の作品をミュージカル化したものや黒人演劇、更には、イギリスやアイルランドの名作などにも接することが出来た。活字で読んでいた作品が、本場の劇場で実際に原語で上演される現場に頻繁に立ち会えたことは、非常に大きな喜びであると同時に、自らの好奇心を刺激する知的な冒険でもあった。

最後に、このような貴重な経験をする機会を提供してくれた大学に感謝するとともに、この1年間の「成果」を今後の教育や研究に最大限に活用してゆきたいと思う。



イエール大学、ハークネス・タワーにて
（本学英文学科2008年度卒業生による撮影）

学外研究報告

学外研究を終えて



社会学科教授
千葉立也

昨2008年度1年間、東京大学総合文化研究科に公立大学研修員として受け入れていただきました。すでに世代交代し後輩ばかりになってしまった「人文地理学教室」のスタッフにはいろいろ迷惑をかけたことと思いますが、大学のゼミにも出させてもらい、ふだんあまり味わえない研究的な雰囲気にも触れ、「若返る」ことができました。かなりの数の電子ジャーナルへのアクセスが手軽に行え、こんなに便利だったものと実感できました（都留ではアクセスできる雑誌の種類は限られており、教員数が1人しかいない研究分野では残念ながら使おうという気になりません）。

また、学外研究の機会を得ることで、授業を担当しているときにはなかなか難しい、まとまった調査旅行も可能となりました。ジオグラファーとして「生き返った」という上でも貴重な機会だったといえます。この点で、独法化を前にいろいろ大変であった1年間、学外研究の機会をお認めいただいた教授会の皆様方に感謝いたします。

さて1年間を振り返り、記憶に残ることといえば、やはりフィールド調査です。

6月下旬から7月上旬にかけて、エスニック地理学研究をテーマとした科研費研究

見聞を深めた1年でした

（分担研究者として参加）の一環として行っている、日本の先住民族、アイヌ民族の文化復興・再生の現状を把握することを目的に、北海道で調査しました。現在、アイヌ文化振興法にもとづいてアイヌの「伝統的生活空間の復元」事業が、白老町、平取町の2カ所で進められていますが、ほかに4カ所でも準備が進んでいます。すでにこの2カ所は聞き取りをしているので、今回は、これまで訪れていなかった、帯広、釧路、旭川で聞き取りをしたほか、世界遺産シレトコのエコツーリズムにおいてアイヌ民族の視点から企画されている取組や、博物館展示におけるアイヌ民族の歴史や文化の扱われ方も見て回りました。

この時期を選んだのは、昨年7月の洞爺湖サミットに合わせて企画された先住民族サミットが行われるということからでした。07年9月の国連における先住民族権利宣言採択を機に、アイヌ民族を先住民族として認める国会決議がなされましたが、日本社会全体としてみると関心は低く、問題にきちんと向き合おうという態度が広がっていないといえるでしょう。参加したのは最終日の札幌での集会だけでしたが、公式行事のあとには音楽・ダンスなどのイベン



旭川市で取り組まれているアイヌ語地名表示

トも行われ、若い人や家族連れなどの参加に、アイヌ民族文化の復興・再生の新たな息吹を感じることができました。

また、道東にいく機会にあわせて、本学に来て初めて担当したゼミの卒業生、松村君が別海高校の教員をしているというので、会ってきました（写真）。社会学科のフィールドワークでも、訪れた町の役場などで、卒業生がいますよと、教えていただくことも多いのですが、ゼミ卒業生となると格別な思いです。活躍している卒業生に出会って元気をもらいました。

前任校でサバティカルリープをとってから17年、やっと得た機会でした。定年退職まで4年を切ってしまいましたが、新たな気持ちでリスタートというところです。



卒業生の松村君と；別海高校にて

学外研究報告

学外研究を終えて



比較文化学科教授
大辻千恵子

2008年度の後半の半年間、貴重な学外研究の機会に恵まれました。これまで「福祉国家とジェンダー」のテーマで研究を続けてきまして、フィールドであるアメリカ合衆国とオランダにそれぞれ短期ですが滞在することにしました。オランダはパートタイム労働で雇用を増やし失業率を減らし、経済の活性化をめざす雇用政策「オランダ・モデル」、また夫婦がともにパートタイムで働きともに家事・育児を担う「コンビネーション・シナリオ」を採用しているといわれています。アムステルダムに滞在しましたが、レンガづくりの落ち着いたしっとりした街並みと豊かな自然に、静かな時のながれを感じながら過ごすことができました。10月に出かけたのですが、朝は8時半近くまで明けず、遅い一日のはじまりでした。アムステルダム自由大学で必要な資料を入手しつつ、執筆しなければならぬ論文（大恐慌期の合衆国における女性と労働—既婚女性の労働権の考察から）の準備を進めながら過ごしました。知り合いになったセネガル人男性と日本人女性の若いカップルをみると、子育てはたしかに半々、双方が料理をつくり子供の

夢のような半年間

世話をし、ウィークデーにも数日は休みといった具合でした。主に電車を利用しましたが、犬も電車に慣れているようで、吠えもせず、ごく自然に「乗車」し、乗客とも「会話」していました。また低い乗車口は小さな子供や高齢者、また乳母車や車いすにも非常にやさしく、なるほどと感心したものです。ある日、午後4時すぎに電車に乗ったところ、通勤ラッシュで、はじめてパートタイム制というものの意味を実感しました。また写真のように実に重そうな荷車に（実際のどの程度の重さなのかわかりませんが）子供を一人、あるいは二人乗せた女性や男性がひしひしにペダルを漕いでいました。重いだろうと思ったのですが、決して恰好よいとは言えないのですが、こうした自転車に当り前のように乗っている人々の姿をみて堅実な暮らしぶりを垣間見た気がしました。オランダは自転車通勤・通学で有名ですが、自転車道のない

通りでは自転車が優先のようで、車のドライバーは辛抱強く、クラクションを鳴らすこともなく、自転車の後に辛抱強く続く光景には驚きました。日本では考えられないことです。

帰国後論文執筆を終え、3月に3週間ほどカリフォルニア大学バークレー校でリサーチ（1990年代の福祉改革と厳罰化政策との関係—監視社会の大量拘禁システム）に明け暮れました。大学への入口には、さまざまな人種やエスニックの学生の顔写真とかれらの大学生活に関することばを大きく載せたフラッグが何本もたっており、とても印象的でした。これまで東部の大学に滞在することが多かったのですが、有色の学生の多さを改めて感じるとともに、バークレーの大学図書館サービスの充実ぶりに、うれしい悲鳴をあげながらの史資料収集という、短いながらも至福のひとつときを送ることができました。



特集

公立大学法人都留文科大学設立にあたって

～常勤役員から～

大学を愛し
学生を愛する

理事長 西室陽一



平成18年11月、都留文科大学法人化検討委員会の第1回会合が開催された。市長の冒頭挨拶で“現在の都留文大は、健全に運営されているが、今後少子化に伴い大学運営上種々の困難が予想される。健全なうちに将来対策を考えて欲しい”との事であった。

私は前年都留市基本計画作成に携わっていた中で、都留市の将来計画の中心はどこに据えるべきか、その事業は何か。観光・産業誘致・等々の中で、全員が一致して大学を中心とした教育首都であると答えた。「小さな城下町人口3万3千人の市が、大学を運営している事の特異さを、また先人の先見の明を大切にしておくべき」という結論であった(平成17年)。

この検討委員会は、翌19年2月“都留文科大学の在り方について、都留市にふさわしい魅力ある大学づくりを目指して”と題し、様々な改革を実現するためには自主的・自律的に大学の運営を行い、教育研究活動の活性化が図られるような組織が必要である。その為には市立大学に地方独立行政法人制度の導入が適当との報告書をまとめた。

平成19年4月、大学法人化準備委員会が設置され、法人化を円滑に進めるため、市側・大学側・学識経験者側で構成する委員会を設置した。そして大学の定款・理事者数・設置すべき会議等について議論し報告書を取りまとめた。

私はこの2つの委員会のとりまとめ役として、大学と市当局間の考え方の違いを痛感し、果たして合意が成るか大いに懸念する処であったが、結果は報告書にまとめられた。

法人化問題の基本は、大学の自主独立を促すと同時に、教学と経営との分離をもたらす、教員は研究教育に専念させる事ができる。

昨年8月、大学理事長予定者に任命され、検討会取りまとめ役の立場と理事長予定者では、責任の重さが違い身の引き締る思いがあった。大学理事長は大学経営の全責任を負う事になる。長く経済界に身を置いた立場から、人・物・金・情報の全てについて掌握しない限り、経営は成り立たない。また、経営に当たっては、大学を愛し学生

を愛する事が大切である。私の人生最後の歷程をこの大学と共に歩んで行きたい。胸を張って、「都留文大に入った」、「都留文大に勤めている」、といえる大学で在りたいと思う。皆さんのご協力をお願いしたい。

大昔、大学を創る時、図書館の本の数が足りないと、教員や地方有志が

数百ずつ出し合った。

初期の大学生に、種子島から来た青年が居た。彼は休日は私の家にやって来て、私の亡母を都留のお母さんと呼んでくれた。卒業の時「結婚したら新婚旅行は都留に来ます」と言って種子島の先生になった。数年を経て彼は新婦を連れ、お土産に浜木綿の苗を持って来てくれた。浜木綿は幾十年の雪や氷に耐え、うちの庭で立派な木になっている。



公立大学法人都留文科大学
設立記念植樹祭にて

特集

公立大学法人都留文科大学設立にあたって

～常勤役員から～

法人化にあたって

学長兼副理事長 今谷 明



本学は平成21年4月1日から、公立大学法人都留文科大学として一步を踏み出しました。この機会に、学長として、教職員の皆様にお話しさせていただきたいと存じます。

中期目標には、いろいろな目標が定められています。それを踏まえつつ、教員養成系大学として積み上げてきた歴史を活かし、さらなる発展を期すべく、学生を中心に置いた大学づくりをしたいと思っています。そのため、中期目標期間中の都留文科大学の教育研究にかかる重点事項を次の4点としたいと考えております。

1. 学生一人一人の成長を保証する教育の創造
2. 安全・安心で心が通い合う大学生活の創造
3. 優れた研究の創造
4. 地域とともに発展する大学の創造

これらの重点事項の内容について簡単に述べます。

まず、「学生一人一人の成長を保証する教育の創造」については、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーを明確にするとともに、その実質化を図り、本学の教育の品質を保証することを目指します。そのため、FD活動や評価を充実しなければならぬと考えています。

つぎに、「安全・安心で心が通い合う大学生活の創造」ですが、教職員と学生、学生相互の関係の中で学生一人一人が大切にされているという実感がもてるよう、学習支援体制の充実、就職支援の強化、課外活動への支援、教育環境の整備等を行いたいと考えております。

「優れた研究の創造」については、若手研究者の育成を目指した研究費助成、大学として進める重点研究領域の指定、研究費の競争的配分、研究成果の出版助成などを行いたいと思います。また、学科研究費等補助金への積極的な応募を支援したいと考えております。

最後に、「地域とともに発展する大学の創造」については、公開講座等生涯学習への支援、地域との共同研究などを進めたいと思います。

以上が、私の考える重点項目であります。

この世界的な不況の中で、我が国の経済も非常に厳しい状況となっております。しばらくの間は、学生の就職状況は厳しいものとならざるを得ないでしょう。このような変動の激しい社会では、教育の質をより一層高め、学生が社会に出てからも、困難に打ち克ち、社会や自分を取り巻く課題を自ら発見し、学びを通して課題を解決していく力をつけて行くことが大切だと思います。また、そうした質の良い教育を実施することが、少子化の中にあって、質の良い学生を多く集める基盤になるものと考えます。

教職員が一丸となって目標の達成に向かってくださるようお願いして、私の法人化に当たっての挨拶といたします。



特集

公立大学法人都留文科大学設立にあたって

～常勤役員から～

副学長雑感

副学長兼理事 高田理孝



日々緑が濃さを増す季節になりました。木々と大学の校舎が織りなす絶妙なコントラストは、見る者の目を楽しませてくれます。都留に着任して、いつの間にか私も既に30年を超えました。そして4月からは赴任当時には想像だにできなかった副学長という重責を任されることとなりました。この30年間、大学を取り巻く木々が成長するのと軌を一にするように、都留文科大学は着実に発展してきました。そんな本学が、現在大きな節目を迎えています。それは、1年間の法人化準備委員会での議論、そしてその後1年間の準備作業を経て本学が4月1日をもって法人化されたことです。そこに至る昨年度後半の経緯は教員・職員にとってまだ記憶に新しい事柄だと思います。

都留文科大学の50年を超える歴史の中で、今回の法人化は短大創設・4年生大学への改組と並ぶ大きな出来事になります。前回の大改革である4年生大学への改組が行われたのは1960年で、既に50年近くが経過しました。4年制大学化については、少なくともその後の社会情勢の変化と本学の発展を見れば、それが失敗であるとする評価は、おそらく無いであろうと思います。それでは、今回の法人化についてはどうでしょうか。

歴史上の出来事については、その評価が安定するのには極めて長いスパンが必要であり、例えばヨーロッパにおけ

るナポレオンに対する評価は19世紀と20世紀では大きく変わっています。それは別として、都留文科大学の歴史に限定しても、大変革になる法人化はまだ始まったばかりですが、その評価が固まるのには次の50年が必要かもしれません。しかし、後世どのような評価が下されるにしても、その評価の基軸をなすのは、2009年の日本において法人化された本学がこれから何を目指し、何を成し遂げ、その結果本学がどのように変化するかということでしょう。

本学に関わるあらゆる人々 — 学生・教員・職員・市民 — で本学の維持・発展を望まぬ者は皆無のはずです。大学の枠組みは変わりましたが、先人たちが築いて来た良き伝統を継承し、さらに新たな都留文科大学の伝統を構築する、それが現在の我々に与えられた課題であると思います。言い換えれば、後世の審判に耐え得る都留文科大学を築く、そのために自分なりに最大限の努力をする、それが法人化という大波に遭遇した個々の教員・職員の責務であろう。都留文科大学を愛する一個人としてこんなことを考える昨今です。



趣味のサイクリングで奥多摩湖へ

特集

公立大学法人都留文科大学設立にあたって

～常勤役員から～

学術・研究担当として

副学長兼理事 福田誠治



大学は競争の海に放り出されてしまった。1995年元旦にWTOが活動を開始するが、そこにはGATSという付属書がついていた。これは、すべての行為をサービスととらえて商行為に変えてしまうという協定である。仕掛けたのはアメリカ。留学生を呼び寄せよう、アメリカの大学を世界展開させようというわけだ。日本政府は、1994年に留保条件を付けてWTO協定を締結したが、アメリカの攻勢に対して、2002年3月には高等教育については基本的に受け入れる姿勢を表明している。大学独法化とは、そういうことだったのである。国策として大学は企業化される。官営工場払い下げのようなものだ。

欧州連合は、アメリカとは別の道を歩む。1998年にパリ大学800年祭の席に居合わせた4教育相が国境を越えた高等教育の再編に合意する。これが、1999年の『ボローニャ宣言』に結実し、単位互換、単位蓄積を可能とする「欧州高等教育圏」構想が動き出す。ボローニャに始まる勅許状に基づく特権的な「教授会の自治」は、ボローニャの地で終わりを告げることになった。ヨーロッパは、EU内で国境の壁を低くしながら、3年プラス2年という5年間2段階制度をつくり、アメリカの大学と差異化を図った。この宣言は、EUの政策に「ボローニャ・プロセス」として組み込まれ、拘束力を持つようになっている。大学生確保と研究の質の向上を図る、明らかに日米に対する逆襲であった。そこには2003年にロシア連邦が参加し、今や「ボローニャ・プロセス」はトルコから中央アジア諸国を含めた巨大なインフラ整備となっている。

国の保護が徐々に外されていく状況で、われわれはいかに生き残り、発展するか。この原理転換は、一大学とか一国のケースではなくなっている。少なくとも、教員と職員が互いにパートナーとして協力し合って大学を運営していくという原理転換は受け入れざるをえない。教育重視にシフトして、国立大学では平日にはほぼ毎日大学に通うことになっているようだ。本学が、現状の研究条件を維持できれば、十分ではないが、他大学に比べればまだよい。「都留にその人あり」と言われるほどに成果を上げられれば、教育・研究条件を維持発展できる。都留の教員は、結構器用に多様な形で学生指導をしていると思う。学科の特性や、その学年に集まった学生の特性に合わせて指導形態を変え、課外活動で合宿をしたり、自主ゼミを企画したりといろいろ動いている。ただ、学生たちも多様化し、人間関係作りが苦手な者が増えているので、カバーしきれない層の学生をどうするか、学科で今まで以上に対応しなくてはならないだろう。教員が専門領域を深め、その成果が教育に生きてきて、学生たちに感動を与え、活気ある授業ができること、これが理想だ。



OECD本部マーシャルルームにてTUAC/EI合同会議、中央で発言するのがOECD教育局指標統計課長 アンドレア・シュライヒャー、2006年9月

特集

公立大学法人都留文科大学設立にあたって

～常勤役員から～

法人化と大学経営

事務局長兼理事 椎 廣行



都留文科大学は、いろいろな議論のある中、法人化し、新たな経営形態に入った。本学の法人化の特徴は、理事長と学長を別に置くところにある。すなわち、経営と教学が分離して運営されるところにある。理事長、学長それぞれのリーダーシップが発揮され、本学の飛躍に向けて両者の強みが相乗効果をもたらす仕組みを築き上げていくことが課題である。私たち理事は、理事長、学長が適切な判断が下せるよう下支えをすることになる。

さて、法人化によりこれまでと大きく変わる点がある。法人化は、法人と法人の設置者との間で中期目標・計画を契約書とする契約関係にあると擬せられる。法人は、限られた資源

を効率的、効果的に使用し、着実に契約を履行するよう努める義務がある。そのために今年度措置しようとしていることについて、2点に絞り述べることにする。

はじめは、予算についてである。法人化初年度ということではあるが、大学が何をしていくかを明確にするため、戦略的経費として大学創造支援費が計上された。内容は、「理事長・学長等裁量経費」、「戦略的経費」に区分される。「理事長・学長等裁量経費」は、中期目標・計画達成のために、事業の進捗状況からさらに経費を投入する必要が生じた場合や緊急に対応しなければならなくなった場合など、理事長・学長等が必要に応じて資金を投入できるようにす



るためのものである。「戦略的経費」は、中期目標・計画を達成するために、今年度充実を図ろうとするものに必要な経費である。教育研究、就職支援、入学者確保対策、地域貢献、学生自主活動促進、大学広報、FD・SDなどを促進するための経費が確保されている。教育研究促進のためには、これまでにはなかった若手教員研究促進費、新任教員スタートアップ経費、重点領域研究経費、学部資金獲得インセンティブ経費、特別教育研究経費が用意されている。

次に人事である。教員は、都留市の職員から法人職員となり、身分上は公務員ではなくなった。公務員時代は定数が条例で定められていたが、法人化後は定数という概念

はなくなった。今後は、実員ベースで考えていく必要がある。この切り替えがまず求められる。また、人事は経営上の重要事項であり、理事長が経営の視点から総枠を決め、学長がどこに教員を配置するか判断し各年度の人事配置計画を決める

ことになる。もちろん、経営審議会及び教育研究審議会の審議を経て決めることになるが。さらに、人事の選考は、学長の下に置かれる選考委員会で選考を行い、その結果を学長が判断し、適任性を認めるときは教育研究審議会に諮り、決定することとした。

このように、予算、人事と大きく変わることとなるが、大学としての目標を達成するための措置としてご理解いただくとともに、評価を活用し、改善が図られるようPlan-Do-Check-Action (P-D-C-A) のサイクルを生かした大学運営を進めることにご協力をお願いしたい。

2008年度 授業評価アンケート

本学の授業に大きな問題はないが、新たな取り組みでさらに学生の総合的向上を目指す



授業評価部会・前部会長 前田昭彦

本学では2003年から学生による授業評価アンケートを行っている。昨年度の結果の概略を報告する。

まず、実施状況。教員ベースに見ると、前期は全教員299名中183名が参加。実施率は61.2%。後期は309名中199名で、64.4%であった。一昨年の後期に48.5%と下がったが、ほぼ例年なみの実施率となった。非常勤講師の実施率も、前期65.6%、後期60.9%と例年より良かったが、特に専任教員の後期の実施率が75.0%で、これは2004年後期の75.7%に次ぐ高い水準であった。ちなみに専任教員の前期の実施率は50.0%である。

科目ベースで見ると、前期は709科目中244科目で実施（34.4%）。後期は702科目中277科目となっている（39.5%）。後期は4割近くあり、これは例年より高め（これまで最も実施率が高かったのは2005年前期の44.9%）。

質問項目は3ブロックに分かれ、学生の授業への取り組み4問、授業

の進め方4問、授業内容・成果について8問の合計16の質問を設けている。各質問について5段階の順序尺度で回答してもらった結果について、便宜的にその平均値をとり、5点満点の評点と見なした結果が表1、表2である。

授業の種類別に見たのが、表1。「総合的に考えて、この授業を履修して有意義であったと思いますか」との総合評価にあたる問16を見ると、授業全体では前期4.09―後期4.16、講義4.02―4.09、外国語科目4.23―4.28、実習・実験・実技等が4.53―4.47となっている。昨年に引き続き、全部4以上の評価となった。

問16の結果は、すべてにおいて昨年の結果と同じかやや上まわっている。講義に比べ、外国語科目、実習系科目の評価が上回るというのも例年と変わらない結果である。

全体の授業について、その他の質問を見ると、評価が高いのは、問1「授業への出席」（4.37―4.22）、問2「授業への集中」（4.02―4.06）、問7「教材の使い方」（4.00―4.09）問11「講義要項との対応」（4.06―4.10）、問13「知識・考え方の習得」（4.02―4.10）など。これらも例年の傾向から変化はない。

逆に評価の低いのは、問3「予習・復習」（2.99―3.11）、

表1 授業形態に見た各項目の平均値（2008年度）

設問 設問文	全 体		講 義		外国語科目		実習・実験・実技	
	2008 前期	2008 後期	2008 前期	2008 後期	2008 前期	2008 後期	2008 前期	2008 後期
1. あなたはこの授業によく出席しましたか。80%程度（3回程度の欠席）を「普通」とし、5段階で答えてください。	4.37	4.22	4.33	4.18	4.45	4.33	4.58	4.39
2. 授業に出席したときは、授業に集中し、授業内容を理解する努力をしましたか。	4.02	4.06	3.91	3.96	4.35	4.25	4.60	4.48
3. 授業中以外の時間に、予習、復習あるいは授業内容を発展させるための努力をしましたか。	2.99	3.11	2.91	3.01	3.60	3.72	3.23	3.32
4. 授業の内容をよく理解できましたか。	3.73	3.80	3.62	3.72	4.00	4.01	4.33	4.17
5. 説明の仕方あるいは指示の仕方は、理解しやすかったですか。	3.98	4.04	3.90	3.97	4.09	4.13	4.46	4.38
6. 話し方（声の大きさや明瞭さなど）や板書は、わかりやすかったですか。	3.95	4.04	3.86	3.92	4.09	4.17	4.49	4.36
7. プリント、ビデオ、教科書など教材の使われ方は授業内容の理解を助けるものでしたか。	4.00	4.09	3.99	4.08	4.18	4.19	4.00	4.07
8. 学生の反応や理解度に応じた授業の進め方でしたか。	3.84	3.92	3.75	3.85	4.13	4.08	4.32	4.28
9. 授業内容はわかりやすく整理されていたか。	3.99	4.06	3.92	4.00	4.12	4.16	4.45	4.34
10. 授業の内容は、知的な刺激にあふれ、興味深いものでしたか。	3.95	4.05	3.90	4.00	4.05	4.12	4.30	4.28
11. 授業の目標、内容・構成は、講義要項などで事前に示されたものに沿っていましたか。	4.06	4.10	4.01	4.05	4.18	4.17	4.39	4.33
12. 授業のレベル（難易度）は適切でしたか。「最も適切」をYes、「最も不適切」をNoとして答えてください。	3.92	3.98	3.86	3.93	3.94	4.02	4.30	4.25
13. この授業を履修したことで、この分野に関する新しい知識や考え方、技能などを修得できましたか。	4.02	4.10	3.97	4.05	4.00	4.10	4.41	4.35
14. この授業を履修したことで、ものの見方や興味・関心を広げることができましたか。	3.99	4.08	3.96	4.05	3.95	4.06	4.22	4.25
15. この分野あるいは取り扱われたテーマをさらに勉強していきたいと思いませんか。	3.73	3.82	3.68	3.77	3.92	4.02	3.99	4.03
16. 総合的に考えて、この授業を履修して有意義であったと思いませんか。	4.09	4.16	4.02	4.09	4.23	4.28	4.53	4.47

授業評価結果について

問4「授業内容の理解」(3.73－3.80)、問8「学生の反応・理解に応じた授業の進め方がなされていたか」(3.84－3.92)、問15「当該分野等をさらに勉強していきたいか」(3.73－3.82)など。

これも例年指摘されていることだが、「予習・復習」、すなわち「授業中以外の時間に、予習、復習あるいは授業内容を発展させるための努力をしましたか」という設問については、アンケート実施当初から一貫して評価が低い。とりわけ、今年の全体・前期では評価がわずかながら3を下回った。ちなみに昨年は3.07－3.09であった。

学科専門科目・共通系科目別の結果が表2である。

総合評価・問16の結果を見ると英文学科が前後期とも4.24－4.27と最も評価が高い。初等教育学科、比較文

化学科も4以上の評価を得ている。特に比較文化学科の後期4.33というのは、かなり高い数値である。比較文化学科は前々回は3.87－3.91、前回4.01－4.05だったので、この結果を見る限りここ3年向上していると言える。一方、国文学科、社会学科はふるわず、4に届いていないことが多い。2008年度の後期に関しては社会学科は4.07を得ている。

個々の設問を見ると、英文学科では問5～問7の授業の進め方に関する評価で、いずれも4.2程度の高い評価を得ているのは注目できる。これまでは前期でやや低く、後期では良いという評価だったが、昨年度は通年で良い評価だった。

さて、例年「授業の出席率は良いが、授業内容の理解は今ひとつ」というような傾向が見られるが、今年もそれは

大きく変わっていない。総合評価はそれなりの評価を得ており、とりあえず結果に目を通す限り、本学の授業に大きな問題があるとはいえない。もっともこうしたアンケートにより、いちじるしく悪い評価が現れたとしたら、相当に深刻な事態に陥っていると見るべきなので、こうした結果に安心するわけにもいかない。さて、この4月から独立法人化した本学では新しい枠組みで授業評価、FD活動（ファカルティ・ディベロップメント＝一言で言えば「教授力」の総合的向上、となるか）が行われる。それが学生のみなさんの本当の力となるような（開花に長時間かかるものもあるだろう）授業の実現に結びつくことを願う。

(社会学科教授)

表2 各学科専門科目・共通科目別に見た項目の平均値（2008年度）

設問 設問文	初教専門		国文専門		英文専門		社会専門		比較専門		共通教育		共通専門	
	2008 前期	2008 後期	2008 前期	2008 後期	2008 前期	2008 後期	2008 前期	2008 後期	2008 前期	2008 後期	2008 前期	2008 後期	2008 前期	2008 後期
1. あなたはこの授業によく出席しましたか。80%程度(3回程度の欠席)を「普通」とし、5段階で答えてください。	4.36	4.31	4.20	4.10	4.37	4.27	4.39	4.18	4.55	4.16	4.39	4.20	4.41	4.42
2. 授業に出席したときは、授業に集中し、授業内容を理解する努力をしましたか。	4.06	4.15	3.93	3.89	4.11	4.17	3.94	3.85	4.02	4.08	4.00	4.10	4.38	4.24
3. 授業中以外の時間に、予習、復習あるいは授業内容を発展させるための努力をしましたか。	3.02	3.07	3.00	3.02	3.20	3.52	2.95	2.98	2.97	3.21	2.87	3.06	3.04	2.97
4. 授業の内容をよく理解できましたか。	3.87	3.91	3.55	3.52	3.89	3.99	3.58	3.67	3.43	3.74	3.75	3.88	3.87	3.75
5. 説明の仕方あるいは指示の仕方は、理解しやすかったですか。	4.01	4.05	3.87	3.83	4.17	4.18	3.86	4.00	3.73	4.08	4.02	4.10	4.15	4.11
6. 話し方(声の大きさや明瞭さなど)や板書は、わかりやすかったですか。	3.95	4.03	3.87	3.79	4.23	4.17	3.71	3.95	3.76	4.06	4.05	4.06	4.13	4.00
7. プリント、ビデオ、教科書など教材の使われ方は授業内容の理解を助けるものでしたか。	4.03	4.14	4.00	3.84	4.20	4.25	3.90	4.10	4.00	4.25	3.92	4.08	4.24	3.99
8. 学生の反応や理解度に応じた授業の進め方でしたか。	3.89	3.96	3.70	3.70	4.07	4.11	3.69	3.84	3.63	3.91	3.87	4.00	3.99	3.90
9. 授業内容はわかりやすく整理されていましたか。	4.04	4.10	3.88	3.83	4.15	4.19	3.89	4.04	3.78	4.09	4.02	4.12	4.17	4.05
10. 授業の内容は、知的な刺激にあふれ、興味深いものでしたか。	3.99	4.08	3.82	3.84	4.12	4.16	3.86	3.98	3.85	4.24	3.99	4.12	3.93	3.83
11. 授業の目標、内容・構成は、講義要項などで事前に示されたものに沿っていましたか。	4.05	4.06	4.05	3.98	4.21	4.21	3.94	4.03	4.03	4.21	4.09	4.18	4.27	4.05
12. 授業のレベル(難易度)は適切でしたか。「最も適切」をYes、「最も不適切」をNoとして答えてください。	4.05	4.07	3.80	3.75	4.04	4.07	3.79	3.89	3.59	3.96	3.95	4.05	3.97	3.91
13. この授業を履修したことで、この分野に関する新しい知識や考え方、技能などを修得できましたか。	4.09	4.14	3.88	3.91	4.07	4.20	3.94	3.97	3.94	4.21	4.07	4.17	4.18	4.11
14. この授業を履修したことで、ものの見方や興味・関心を広げることができましたか。	4.05	4.11	3.81	3.88	4.06	4.18	3.95	3.99	3.93	4.27	4.04	4.16	3.90	3.82
15. この分野あるいは取り扱われたテーマをさらに勉強していきたいと思いませんか。	3.87	3.89	3.43	3.52	3.87	4.02	3.67	3.76	3.60	3.97	3.71	3.87	3.78	3.68
16. 総合的に考えて、この授業を履修して有意義であったと思いませんか。	4.14	4.19	3.94	3.94	4.24	4.27	3.98	4.07	4.00	4.33	4.13	4.23	4.28	4.17

厳しい雇用情勢のなか、 昨年度の就職状況を振り返る



就職委員長 千葉立也

昨年度（前期卒業生も含めて）、本学では683名の卒業生を送り出しましたが、就職希望者521名の94.4%、492名が決定いたしました。一昨年度の95.3%には及びませんでしたが、5月22日発表の厚生労働省、文部科学省の就職状況調査における大学卒業生の就職率の下げ幅（前年比1.2%減）よりは小幅に留めたといえます（表1）。

また、昨年秋以降、急激に

悪化した雇用情勢のもとで、「派遣切り」とともに「内定取り消し」の多発もマスコミで報じられました。本学でも、キャリアサポート室が把握したところでは、4名の内定取り消しがありましたが、その後、3名が別の企業に決定、また1名は大学院に進学が決まりました。

就職先の内訳は、表2に示した通りです。教員として採用されたものは公立、私立合

わせて153名、昨年度よりも15名増という好成績でした。正規採用となった者も80名にのびりました。公立学校では例年通り、北海道から沖縄まで全国32都道府県に及びますが（臨採を含む）、正規採用については採用数の多い首都圏の比率が高い傾向が続いています。3月末までに得られた情報では、既卒者の採用も40名となっています。模擬面接会でのご指導をはじめ、同窓会のみなさまの熱心なご指導、ご支援のおかげと感謝する次第です。

一昨年度減少した公務員については、やや盛り返しましたが、24名はいずれも地方公務員でした（市町村職員が大部分）。昨年度と比べると男子が急減し、女子の割合が8割近くまでになっていることと関係していると思われます。

就職先としてもっとも多い民間企業では、第三次産業が



同窓会による教職員説明会

平成21年3月卒業生 就職先一覧

■初等教育学学科

- ・ 朝アステム
- ・ 朝デビー精工
- ・ 朝東宝せんてん
- ・ 朝アカデミー・グループ
- ・ 朝インパム
- ・ 朝ウィングメディア
- ・ 朝さなる（佐藤予備校）
- ・ 朝フューチャー
- ・ 朝フォーカスシステムズ
- ・ 朝モスフードサービス
- ・ 朝ラック
- ・ 朝リクルート 住宅カンパニー
- ・ 朝山梨中央銀行
- ・ 朝荘内銀行
- ・ 朝東海プロセッササービス
- ・ 朝東京個別指導学院
- ・ 朝白金工房
- ・ 朝文理学院
- ・ 朝良品計画
- ・ 朝開く会 共働舎
- ・ 朝NEC山梨 山梨日本電気（株）
- ・ 朝ジット
- ・ 朝セントラル短資
- ・ 朝ペリ・データ
- ・ 朝山梨県民信用組合
- ・ 朝山梨県立美術館
- ・ 朝児童養護施設 希望の家
- ・ 朝全日本空輸
- ・ 朝東京レック・ロンAT
- ・ 朝日本海産物
- ・ 朝日本郵政グループ
- ・ 朝昭和女子大学附属昭和小学校

■国文学科

- ・ 朝patina
- ・ 朝TSP
- ・ 朝アルファ・ウェーブ
- ・ 朝スマイルドラッグ
- ・ 朝ツツミ
- ・ 朝ドン・キホーテ
- ・ 朝ビックカメラ
- ・ 朝ライク
- ・ 朝ACO
- ・ 朝BEX
- ・ 朝NTT-ME
- ・ 朝アイデム
- ・ 朝アイライン
- ・ 朝インフォクノ朝日
- ・ 朝さなる
- ・ 朝ジェネティック
- ・ 朝ダイユーエイト
- ・ 朝トップカルチャー
- ・ 朝とらば
- ・ 朝ハイドレイ日高
- ・ 朝ユーストア
- ・ 朝ワールドストアパートナーズ
- ・ 朝共立メンテナンス
- ・ 朝山梨中央銀行
- ・ 朝山梨県立自動車学校
- ・ 朝八十二銀行
- ・ 朝創田かほ座
- ・ 朝HLS
- ・ 朝エー・アンド・アイシステム
- ・ 朝ケキハウス
- ・ 朝ソフタ
- ・ 朝ソラン

- ・ ダイワ情報システム
- ・ ディップ
- ・ プックオフコーポレーション
- ・ ペル・データ
- ・ マナミアミュージメント
- ・ ヤマトプロテック
- ・ 日軒運送 九州支社
- ・ 古地図史料出版
- ・ 高崎信用金庫
- ・ 国立大学法人 浜松医科大学
- ・ 財団法人 東京子ども図書館
- ・ 札幌定通運輸
- ・ 三菱総研DCS
- ・ 住生コンピュータサービス
- ・ 昭和情報機器
- ・ 神戸商事
- ・ 静銀ビジネスクリエイト
- ・ 創造学園グループ
- ・ 総合スタッフグループ
- ・ 東京海上日動システムズ
- ・ 東京銀行電報
- ・ 日本アイ・ビー・エム・サービス
- ・ 日本郵政グループ
- ・ 富士ゼロックスシステムサービス
- ・ 北海道教育委員会
- ・ 福島県教育委員会
- ・ 千葉県教育委員会
- ・ 神奈川県教育委員会
- ・ 山梨県教育委員会
- ・ 岐阜県教育委員会
- ・ 長野県教育委員会
- ・ 愛知県教育委員会
- ・ 名古屋教育委員会
- ・ 大阪府教育委員会

■英文学科

- ・ 愛媛県教育委員会
- ・ 県立長野図書館
- ・ 朝ACN
- ・ 朝JALエクスプレス
- ・ 朝ONE
- ・ 朝アマノ
- ・ 朝カインズ
- ・ 朝グルメマツ
- ・ 朝サウザー
- ・ 朝シャノール
- ・ 朝スバルコンピュータ
- ・ 朝パナソニック
- ・ 朝プリンスホテル
- ・ 朝ヤギ
- ・ 朝秀英予備校
- ・ 朝富士山南英センター
- ・ 朝文理学院
- ・ 朝北陸銀行
- ・ 朝サンドラック
- ・ 朝エイクリイエーション
- ・ 朝ジェネット・コーポレーション
- ・ 朝テルミック
- ・ 朝ルネサンス
- ・ 朝南都銀行
- ・ 朝千葉興業銀行
- ・ 朝天野田酒店
- ・ 朝東輪堂
- ・ 朝日立物流
- ・ 朝介護付有料老人ホーム 瀬河原ゆづり
- ・ J.A. するが路
- ・ アルビス
- ・ アルプス中央信用金庫
- ・ グイングループ
- ・ ジット
- ・ シロキ工業
- ・ テンバスタック
- ・ ナイス
- ・ ファナック
- ・ ミニストップ
- ・ コニヤン株式会社
- ・ 朝本無線電機 甲府営業所
- ・ 朝セミナル
- ・ 三菱UFJ証券
- ・ 朝日本鉄道
- ・ 朝山梨県民信用組合
- ・ 朝東京レック・ロンAT
- ・ 朝東海信用金庫
- ・ 朝日本ホテル
- ・ 朝日本生命保険相互会社 甲府支社
- ・ 朝日本郵政グループ
- ・ 朝八十二システム開発
- ・ 朝山梨県立美術館
- ・ 朝山梨県教育委員会
- ・ 朝山梨県教育委員会
- ・ 朝山梨県教育委員会
- ・ 朝山梨県教育委員会
- ・ 朝山梨県教育委員会
- ・ 朝山梨県教育委員会
- ・ 朝山梨県教育委員会
- ・ 朝山梨県教育委員会
- ・ 朝山梨県教育委員会

講演会だより

講演会のお知らせ

フィンランドの子育て・教育を学ぶ会

日時 7月13日(月)
午後1時10分から午後4時まで
場所 未定
定員 30名程度を予定

主催 初等教育学科・特色GP
問い合わせ・連絡先
初等教育学科・教育実践学系
423研究室 担当／佐藤 隆

特色GPプロジェクトでは、この2年間のなかで「地域と学校」に基盤をおきつつ、実践と理論の往還を原則とした教師教育の新しいあり方を探るべくカナダとフィンランド・タンペレ市在住のニエメラ・ペトリさん、藤井みどりさんご夫妻と知己を得、フィンランドの教育事情を理解する上でのお手伝いをお願いしてきました。お二人には子育て体験を通じて、フィンランドの教育の仕組みや考え方を紹介した著書があります。また、タンペレ市の公認ガイドとして、市内・外の教育・

福祉諸機関とのネットワークを広くお持ちの方です。

このたびお二人が日本に「里帰り」されるということもあり、現実のフィンランドにおける子育て・教育をお話いただき、学生たちの学習意欲を高めたいと思い、講演と懇談の機会を設けることにしました。

初等教育学科の学生を中心に参加の呼びかけを行います。もちろん、講演会は、初等教育学科以外の学生や教職員・市民の方の参加も歓迎します。

英文学科共催・2009年英文学会春季講演会

日時 7月1日(水) 16時30分～18時
(総会は16時～16時30分)
場所 2号館101教室
講師 八木克正(やぎかつまさ)教授
演題 Phraseology入門
～現代英語研究の新たな展開～
入場料 無料

講師紹介

八木先生の専門分野は英語学・言語学・英語辞書学・英語音声学。所属学会は、日本英語学会、英語語法文法学会(前会長)、日本英語コミュニケーション学会(理事)、日本英語音声学(副会長)、大学英語教育学会等。御著書に、『英語の文法と語法一意味からのアプローチ』(研究社出版)、『英和辞典の研究—英語認識の改善のために』(開拓社)、『英語で自己表現 大学英語のフレッシュスタート』(英宝社)等がある。その他に、論文・学会報告多数。

社会学科・地域社会学会主催講演会

日時 7月15日(水) 午後6時30分
(8時終了予定)
場所 2号館1階 2101教室
講師 伊勢崎賢治(いせさきけんじ)氏
(東京外国語大学 大学院地域文化研究科教授 紛争予防と平和構築 講座長)
演題 平和はつくれるか

講師紹介

内戦初期のシエラレオネを皮切りにアフリカ3か国で10年間、開発援助に従事し、その後、東チモールで国連PKO暫定行政府の県知事を務め、再びシエラレオネへ。同じく国連PKOの幹部として武装解除を担当し内戦の終結に貢献する。その後、アフガニスタンにおける武装解除を担当する日本政府特別代表を務める。御著書に、田中裕二・大田光・伊勢崎賢治『爆笑問題のニッポンの教養 平和は闘いだ』(講談社、2008年)、伊勢崎賢治『自衛隊の国際貢献は憲法9条で』(かもがわ出版、2008年)、伊勢崎賢治『武装解除 紛争屋が見た世界』(講談社現代新書、2004年)等。

文大だより

初等教育学科音楽専攻 演奏会

春のコンサートを終えて



初等教育学科 音楽専攻 3年 田吉愛美

私たちが所属する初等教育学科音楽専攻では5月23日(土)に春のコンサートを催しました。

音楽専攻では毎年3つの演奏会があります。春のコンサート、秋のコンサート、そして大学生活の集大成である卒業演奏会です。その中でも、春のコンサートは新年度になり新しい環境で生活する私たちにとって初めてのステージで、特に入学してきたばかりの新入生や新しく専攻が決まった2年生、そして転科生・編入生にとっては「入ってきて1ヶ月程で、一人で、しかも人前で演奏するの!？」と驚いてしまうステージでもあります。演奏会の運営も学生同士で話し合いながら進めていくので、とても自主的な活動の一環だと思います。高校時代まで私が経験していた演奏会は、演奏だけに集中していて運営や裏方の仕事内容を全く把握出来ていませんでした。

大学に入学して3年目、今年は責任者という立場で初めての演奏会でした。いつもは自分自身の演奏を1番に考えていましたが、今



回は専攻生全員の演奏が気持ちよくでき、成功に終わるような環境をつくりたいと目標に立てることにしました。先輩に何度

も詳しく引継をしてもらいましたが、とても不安でいっぱいでした。裏方の仕事を把握したりするのも精一杯で毎日頭が重かったです。正直、ここまで誰かの為に動き回るのはほとんど初めてのことで、演奏会が終わってふと考えると、良い経験が出来たのだと実感しました。演奏だけに集中し、一つのステージを作り上げていくというのはとても素晴らしいことだと思います。しかし、音楽専

攻で催している演奏会は単に自分の演奏だけを考えるのではなく、誰かのことを考えて、様々なことに気を配り、演奏する私たちだけでなく、お客様に気持ち良く演奏を聴いてもらうために裏方で動いています。演奏会で、自分自身の曲を追求していくのはとても勉強になります。しかし、音楽専攻のコンサートでそういうことは当たり前です。自主的に行動するというのをたくさんの学生が学んでいると思います。私も学ぶことができましたが、一番学んだことは感謝することです。当たり前のことのように思えますが、とても大切なことを学んだように思えます。

今回学んだことをこれからの自分自身の生きていく糧にし、日々精進していきます。大学生活残り約2年、たくさんの仲間と切磋琢磨しながらお互いに成長していきたいです。

最後になりましたが、このコンサートに足をお運びくださったお客様をはじめ、ご指導くださった先生方に心より御礼申し上げますとともに、お互いを支え合いコンサートを成功に導くことのできた音楽専攻の仲間感謝の気持ちを伝えたいと思います。



文大だより

本学陸上競技部女子がBS日テレで特集放映 「第88回関東インカレ 本学陸上競技部女子4×400m準優勝」

5月30日午後10時～11時BS日テレ放送の『BSスポーツ LIVE&Dream』において本学陸上競技部女子が特集放映された。

今回の放映では関東学生陸上競技対校選手権大会（関東インカレ）4×400m女子リ

レーで、おとし、去年と2連覇し、今年は3連覇を狙う注目の本学にスポットを当て、大会前の練習から大会までを陸上競技部麻場監督がゲストとなりドキュメンタリーとして放映した。

また、5月24日の関東イ



生出演した麻場一徳教授

ンカレ大会では、1走：北村千聖（初教1年）、2走：笹本絢（初教3年）、3走：長倉由佳（初教4年）、アンカー：上

田千曉（初教4年）のオーダーで臨んだ。今年は3連覇のプレッシャーから惜しくも早稲田大学に僅差で破れ2位となったが、今後も同部は麻場監督の下で活躍が期待される。



ドキュメンタリーとしてTV放映された時の一場面（インタビューされているのはキャプテンの上田千曉選手）



全国38局ネットFMラジオ番組が 本学で公開収録

4月14日午後6時30分から本学音楽棟3階のアンサンブル室において、東京エフエム放送（JFN38局ネット）深夜番組「アジアンリミテッドDX」の公開収録が行われた。

この番組は本学マンドリン部社会学科1年の知念浩生さんが応募した学校訪問企画で、ゲストには昨年の紅白に

も出演した「GIRL NEXT DOOR」、「オトナモード」



が来場した。

本学マンドリン部員をはじめ約100名の学生がアンサンブル室に集まり、マンドリン部の演奏や本学の紹介、ゲストの小ライブなどが行われた。また、この収録の様子は4月21日深夜1時から3時までの間放送された。

写真：公開収録中の様子

朝日新聞 Be-evening 「花まる先生」公開授業に本学卒業生

3月14日の朝日新聞夕刊Be-evening「花まる先生」公開授業に本学国文学科卒業で、広島県福山市立箕島小学校教諭の小笠原さと子さんが

掲載された。

記事の中では、1年生の国語の授業風景が取り上げられ、小笠原先生が教科書を何度も何度も情感豊に読み聞か

せ、「読むこと」と同時に「書くこと」「話すこと」の大切さを伝える様子が描かれていた。本学を卒業し教壇に立つ多くの方々が全国各地で活躍している。

文大だより

元学長 大田堯氏
本学フィールド・ミュージアム視察

5月13日から15日の3日間、元学長大田堯氏が本学を訪れ地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム部門を視察されました。

今回の視察目的は、大田氏のお住まいになる東浦和の見沼周辺をフィールド・ミュージアムとする構想がありその手がかりを探るためのもので、自身が学長時代に始まった都留博物館構想（＝フィールド・ミュージアム構想）の取り組みを参考にしたいとのことであった。

本学からは社会学科畑潤教授を中心に、初等教育学科田中孝彦教授、地域交流研究センター今泉吉晴名誉教授、北垣憲仁非常勤講師など古くから親交のある教員たちが出迎え、附属図書館や都留文科大学前駅にあるビオトープや、楽山公園など大学周辺を中心に案内した。

また、戦後教育思想という観点から大田氏のドキュメンタリー映画の制作も始まっており、今回の視察の際には監督とカメラマンが同行し撮影



左から今泉吉晴名誉教授、大田元学長
田中孝彦教授

も行われていた。

大田氏は既に90歳を超えられているが、年齢とは関係なく今後も新たな構想の実現に向け、多方面に活動を展開させていくとのことである。



監督とカメラマンによる撮影も交え、大学周辺を視察した大田元学長

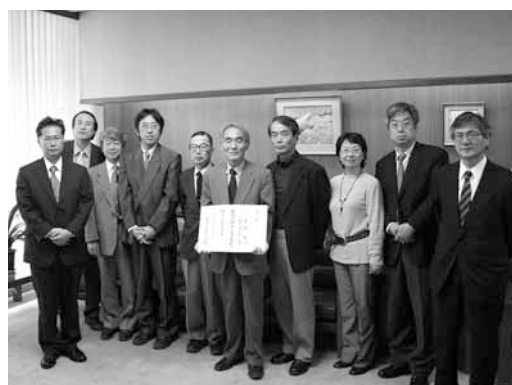
四氏に名誉教授の称号を授与

5月27日(水) 本学名誉教授称号授与式が学長室において行われた。

今回名誉教授の称号が授与されたのは、元初等教育学科教授箱石泰和氏、元英文学科教授林信義氏、元社会学科教授平野英一氏及び同学科元教授川上則道氏の4氏。式典当日箱石氏、林氏、川上氏は所用のため欠席されることとな

ったが、出席した平野氏には高田副学長、福田副学長、社会学科前田学科長を始め全学科長が列席するなかで、今谷明学長から名誉教授認定証が授与された。

箱石氏、平野氏、川上氏はそれぞれ本学を退職し個別に研究活動が続けているが、現



名誉教授認定証が授与された平野氏

在も本学非常勤講師としても活躍中である。

文大だより

第40回つる子どもまつり開催



5月17日(日) 今年で40回目となる「つる子どもまつり」が、雲間からの薄日射す中市内の幼児から小学生の子どもたちを集め開催された。

地域市民のボランティア団体や本学学生サークルが、子どもたちを対象に神楽実演鑑賞会、影絵遊び、スライム作

りや、のこぎりや金づちを使った木工品作り体験イベントに取組んだ。

午後からは本学グラウンドを使い泥棒と警察を似せたゲームなどが実施され、キャンパス内に元気な子どもたちの声



が響いていた。

今回は午後3時の終了時間に雨が降り出すなどしたため、あわただしい閉会であったが、本学の学生が中心となり子どもたちを介して地域住民と交流する歴史と伝統のあるイベントとして、今後も地域貢献の一貫として長く引き継がれることが期待される。



児童文化研究部が文部科学大臣賞受賞

4月23日文部科学省主催の平成21年度「子ども読書の日」記念“子どもの読書活動推進フォーラム”が国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて開催され、本学児童文化研究部が子ども図

書活動優秀実践団体として文部科学大臣賞を受賞した。

同部は「子どものよりよい成長・発達をねがい、子どもにとってよりよい文化とは何かを考え、普及する。」という理念に基づき、大型紙芝居

や大型絵本、パネルシアターなどを作り近隣幼稚園や県内の保育園などで読み聞かせを実践してきたため、その地道な活動が評価された。同フォーラムでも大学のサークルが受賞することは珍しいため、表彰団体の事例報告にも選ばれ同部の実践報告が行われた。

平成21年度教員免許状更新講習開講

教員免許状更新制が本学においても、文部科学省の認可を受け、6月6日(土)から更新講習を開講した。

講習内容は小学校教員向け選択領域6時間講習を11講座、中高教員向け選択領域6時間講習を11講座、小中高教員向け必修領域12時間講習を1講座実施する予定で、今年11月半ばまでの土曜日や夏休み期間中を利用し順次開講する。

特に選択領域の各講習は、専門分野ごとに少人

数制クラスで、現職教員である受講者のニーズを反映する講習となっている。また、県

内外の現職教員や本学卒業生などからの要望もあり、本学では県内ばかりでなく他地域からも受講者を募る。

受講料は選択領域が1講座6,000円、必修領域は1講座12,000円で、本学ホームページにより講習内容詳細を掲載し、受講申込も受付中である。

■問合せ先

学生課教職担当(免許更新講習事務局)

文大だより

平成21年度現職教員教育講座開講 「夏季集中講座」

主催：地域交流研究センター、初等教育学科

本学2号館101教室で、7月29日(水)～31日(金)の3日間「教師の子ども理解と学習指導」と題したテーマで、現職教員教育講座を開講します。講座内容・申込方法については下記のとおりです。

■日程・講座内容

7月29日(水)

- ・午前 9:30～午前 9:45
受講受付
- ・午前 9:45～午前10:00
『講座の趣旨について』
説明：杉本光司（地域交流研究センター長）
- ・午前10:00～午後12:00
『教師の子ども理解と学習指導Ⅰ』
講師：筒井潤子（初等教育学科准教授）
- ・午後 1:00～午後 3:00
『教師の子ども理解と学習指導Ⅱ』
講師：佐藤 隆（初等教育学科教授）

7月30日(木)

- ・午前10:00～午後12:00
『子ども理解と国語科学学習指導』
ー子どもたちと本の世界へー
講師：藤本 恵（初等教育学科准教授）
- ・午後 1:00～午後 3:00
『子ども理解と算数科学学習指導』
ー子どもの目線に立った論理的思考力の育成ー
講師：植村憲治（初等教育学科教授）

7月31日(金)

- ・午前10:00～午後12:00
『今求められる情報教育リテラシーⅠ』
- ・午後 1:00～午後 3:00
『今求められる情報教育リテラシーⅡ』
講師：杉本光司（同センター長兼情報センター教授）

■受講方法

- 受講申し込み
7月24日(金)までに都留文科大学総務課総務企画担当に申込んで下さい。
HPからも申込みが出来ます。
- 受講料（資料代）
1,000円 受講当日に、冊子と引き換えにお支払い下さい。
昼食は各自でご用意下さい。飲物は当日準備いたします。
- 受講時間
全日参加も部分参加も可とします。但し受講料は同じです。

■問合せ先

総務課総務企画担当

人 事 異 動

平成21年4月1日付の都留市職員人事異動は、法人化により大学在職の事務職員が、総務部政策形成課からの派遣扱いとなり、教職員については公立大学法人都留文科大学職員に身分が引継がれました。実質的な人事異動のみを次のとおり掲載します。なお、氏名の前が異動先（ ）内は前職です。

採用

初等教育学科教授 田中昌弥
英文学科准教授 三浦幸子
初等教育学科講師 市原 学

退職

箱石泰和（初等教育学科教授）
平野英一（社会学科教授）
富樫 剛（英文学科准教授）
瀧本康男（大学事務局長）
渡辺 厚（総務課課長補佐兼入試室長）
園田恭子（総務課主幹）
星野松恵（学生課主幹）

転入

総務課課長補佐兼入試室長 小笠原武彦（教育委員会学びのまちづくり課課長補佐）/経営企画室副室長 高部 剛（福祉課課長補佐）/学生課主査 田中正樹（政策形成課主査・山梨県市町村総合事務組合）/総務課主事 石原優一（政策

形成課主事・採用）/学生課主事 小俣 覚（政策形成課主事・採用）

昇任

総務課主幹 藤本信夫（総務課副主幹）/総務課副主幹 吉田時代（総務課主査）/学生課主査 谷内ゆかり（学生課副主査）



編集後記

変わらなきゃ！

菊池信輝

新広報委員長の菊池信輝と申します。いろいろと社会を渡り歩いていた経験を活かし（その珍道中については『学報107号』の「文大に着任するにあたって」や、同『108号』の「編集後記」をご参照ください）、本学のPRと学内外の交流、意見交換の機会づくり等々に全力を尽くす所存です。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、新装開店、公立大学法人として生まれ変わった都留文科大学の門出ということで、今回の学報は理事長、学長兼副理事長、事務局長並びに学内理事諸氏にご寄稿いただきました。

「熱いメッセージ」をお願いしておいたのですが、いかがでしたでしょうか？きっと、「法人化してどうなるの？」「どんな人が大学の運営に携わっているの？」という皆様のご疑問にかなりお答えできたのではないかと思います。

これからも本誌は（表裏カラーにしてもらったし）、本学の「チェンジ」について皆様にお伝えし、一緒に本学をよくしていくために考えていきたいと思っています。なにしろ、法人化自体は単なる大学改革の入り口、ないし手法の1つに過ぎないのでから。

ところで「チェンジ」と言えば、米国の政権交代、その米国一極集中型経済の崩壊、格差をもたらしたとされる新自由主義改革への広範な批判の噴出、そしてまだ予想の範囲ですが日本の国政にも大きな変革が起こってきています。

個人的には、尊敬していた日本最強のロック・ミュージシャンが5月の連休中に亡くなられたことが印象に残っています。広報委員長という大役を仰せつかったことと合わせ、大きな時代の転換点をひしひしと感じております。

とはいえ、私自身がなにか変わったのかというと、十年一日の如くさっぱり進歩の跡が見られません。頭をかきむしっては原稿を書き直し、資料を読んでほんどくさくなってほっぴり出し、討論をすればむきになって頭から湯気が……。

まったくもって私も「変わらなきゃ！」いけないので……そうだ、久しぶりにバンドでもやるかな。



最初に人前で演奏したのは、RCサクセッションの「チャンスは今夜」だったりする。

夏季オープンキャンパス

平成21年7月25日(土) 午前9時～午後3時

【主な内容】

学科別説明会／卒業後の進路と就職状況説明会
学科別特別講義／進学相談会／留学制度相談会
学生生活相談会／キャンパスツアー／学食体験
体育会、文化会等の活動報告



学生による進学相談

秋季オープンキャンパス

平成21年10月15日(木)～10月27日(火)（水曜・土曜・日曜を除く）
午前9時10分～午後4時20分

【主な内容】

公開授業体験／キャンパスツアー／進学相談／学食体験

【申込方法】 本学のHPへの直接申込とFAXによる申込があります。
受付開始（専用HP開設）は、夏季・秋季共に開催日1ヶ月前を
予定しています。

【問合せ先】 総務課総務企画担当

現代イタリアの
社会保障

ユニバーサル・サリズムを越えて

小島晴洋・小谷眞男・鈴木桂樹

田中夏子・中益陽子・宮崎理枝／著

2009年3月出版 旬報社 4,300円＋税

◇たなかかつこ 社会学科教授
◇なかますようこ 社会学科講師

本

ぶんだい堂

